

---

# 恋文～いまだ忘れえぬ君へ～

橘伊津姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋文〜いまだ忘れえぬ君へ〜

### 【Nコード】

N5716V

### 【作者名】

橘伊津姫

### 【あらすじ】

ある日、皐月が道で拾った一通の手紙。宛先も差出人も不明なその手紙を開いた時に始まる、とある恋のお話。  
あなたは自分の「恋」に全力ですか？

拙サイト「皓月迷宮」にて公開中です。

今にも泣き出しそうな、どんよりとした曇り空の下、空模様と同じような表情で皐月<sup>さつき</sup>は歩いてた。若さに似合わないため息をつきながら、歩道橋の階段に差し掛かった皐月の足が、何かを見つけて立ち止まった。

「え？何？」

靴の先に触れているのは、一通の手紙だった。何人もの人に踏まれ、車につぶされた封筒は茶色く変色している。何故そんな封筒が目についたのか。皐月自身にも判らなかった。ただ、その封筒が、皐月を呼び止めたような気がしたのだ。

不思議な気分を抱えながら、皐月はその手紙を放っておく事も出来ず、迷った末、拾い上げて帰途に着いた。

一人暮らしのアパートは、灯りを点けても寒々しい。

皐月は、熱いシャワーを浴びても、一向にさっぱりしない気持ちを持って余しながら、バスルームから出て来た。バスタオルで髪を拭いながら、冷蔵庫の中からスポーツドリンクを引っ張り出す。キャップをひねりながら、ビーズクッションへ身を沈める。程よい弾力と手触りのいいクッションは、それでも皐月の心を癒しはしなかった。

「はあ  
ー」

スポーツドリンクを口に含み、その冷たさと仄かな甘さを楽しんだ後、ゆっくりと飲み込んだ。

タオルをワシワシと動かしながら、何気なく見やった視線の先、テレビの上に置かれた写真立て。中には幸せそうな笑顔の皐月と男性の姿が写し出されている。男性の名前は梶原功一。つい一週間前まで皐月の恋人だった男性である。

付き合って二年目の記念日に、つまらない事がきっかけで喧嘩別

れしてしまったのだ。しかし、皐月にとってこの別れは到底納得のいくものではなかった。どうしてこんな事になってしまったのか。ふと気が付けば、こんな事ばかり考えている。そんな皐月の様子を見て、友人達は合コンに誘ったり遊びを計画したりしてくれたのだが、気分が乗らないまま断り続けていた。

今日一日だけでも、何度目になるのか判らなくなってしまったため息を吐き出し、飲みかけのスポーツドリンクを仕舞うために立ち上がった皐月は、ローチェストの上に放り出したままになっていた封筒に気が付いた。

その封筒には差出人の名前も宛先も記入されていない。過酷な状況下に長時間さらされていたために、角は折れ曲がり、封も剥がれている。

「これって、一体誰の手紙なんだろう？何か大切な用件だったりしたら 困るよね、やっぱり……」

何故だか無性に心を刺激する手紙だった。

「そう言えば、最近メールばかりで、手紙って書いてないなあ」  
封筒をためすがえつしながら、再度クツションに身を沈める。

「中に、名前とか書いてないのかしら？」

他人の手紙を覗き見る罪悪感を少しでもごまかすために、皐月は自分自身に問いかけると、封筒から中身を引き出した。開いた便箋には、皐月の予想に反して誰の名前も書かれてはいなかった。

「いまだ忘れえぬ君へ ？」

手紙の書き出しは、そんな文章で始まっていた。

いまだ忘れえぬ君へ

君と会わなくなってから、早いもので、もう二ヶ月になるんだね。君は元気でやっているだろうか？

今更こんな手紙を書くなんて、自分でも未練がましいと思うよ。でもね、どうしても、君に伝えておきたかったんだ。

僕がどれだけ、君の事を思っていたかを。

どうしても、伝えておきたかったんだ。

それは、別れてしまった恋人が、元彼女に宛てた手紙だった。  
「この二人も別れちゃったんだ。何だか、他人事じゃないなあ」  
いけないと思いつつも、先を読むのを止められない。

君と始めて会ったのは、二年前の春だった。

大学のゼミで見かけたときから、ずっと気になっていたんだ。  
君は知らないだろうね。君がいたから、僕はあのゼミを取ったんだ。  
正直なところ教授の話なんて、全然聞いちゃいなかったよ。  
君に告白しようと決めた時。本当はあの時、心臓がバクバクして死  
にそうだったんだ。  
君がOKしてくれた時、踊り出しそうな自分を抑えるのに、必死だ  
ったんだよ。

「へえ。あたしも功一と知り合ったのは、大学のゼミだったなあ。  
目が離せなかったんだっけ。あの頃の功一、すっごく輝いていたの  
よね」

皐月と功一が出会ったのも、手紙の主と同じく二年前の春だった。  
大学三年の時、選択したゼミの教室で彼を見かけたのが、始まりで  
ある。友人達と話し込んでいる功一の姿から、目が離せなかった。  
皐月の目には、自信に満ちてとても輝いて見えたのだ。

功一と親しくなりたくて、渋る友人を拝み倒し、合コンの予定を  
組んでもらった事もある。彼と話が出来るようになった頃は、ただ  
それだけで嬉しかった。毎日が、何か素晴らしいモノで満たされて  
いるような気がしていた。それに相応しい自分になりたかった。

出会ってから半年。功一から付き合ってくれと言われた時、それ  
こそ天にも昇る気持ちだった。踊り出しそうになる自分を、どうや  
って抑えたのか、思い出せないくらいだ。

付き合い始めた頃は、お互いに何だかギコチなくて、変な感じだったよね。

二人で初めて行ったデートの事は覚えているかな？

緊張しすぎて失敗している僕を見て、君はようやく笑ってくれたよね。

あの時に行った遊園地、今、あのパレードをやっているの知ってる？君の家には門限があつて、それに間に合わせるために、パレードはあんまりじっくり見れなかった。

だからいつか、このパレードをゆっくりと見に来ようね、って約束したっけ。

結局、その前に僕達は別れてしまった訳だけど。

「遊園地に行きたい」

そう言い出したのは皐月だった。大学のゼミが休講になったと知らせる掲示板の前で、時間を持て余してしまった二人。お互いの顔を見合わせながら、これからどうするか思案にくれた。

「どーすっかなー。皐月ちゃん、どこか行きたい所、ある？」

偶然の成り行きで、初デートにこぎつけた皐月は、弾む心で功一に告げた。

「遊園地かぁ。どうせヒマだしな。よし、行くか」

電車を乗り継ぎ、パレードで有名な遊園地にやって来た。電車の中では、会話が途切れるのを恐れるように、ひたすらしゃべっていたような気がする。何を話したのかは憶えていない。ただとにかく、二人の間に沈黙が降りるのが怖かったのだ。

「平日だから、結構、空いてるね」

入場チケットを二人分購入し、にぎやかな園内に足を踏み入れる。日常の中に開かれた、非日常の空間。音楽を聴いただけで、心がワクワクする。

「遊園地、久し振りだわぁー」

「俺だつて随分来てないよ。久し振りだなあ」

童心にかえったような表情をして、功一も辺りを見回した。

「あ、ジェット・コースター乗ろうよ」

皐月がジェット・コースターを指差して誘うと、功一は何とも言えない顔をした。

「え、あ、ジェット・コースター？」

「あれ？駄目？」

「いや、駄目って事はないけどさ……」

イマイチ乗り気でなさそうな功一を引っ張り、ジェット・コースターの乗り場へ向かった。猛スピードで疾走、上昇、下降を繰り返すコースターに振り回されていると、日々のストレスが飛んでいくのが判る。皐月は思いつ切り大声を出しながら、コースターの疾走感に身を任せていた。

「あー、気持ち良かった！ 後でもう一回、乗りたいね」

隣を歩いていた功一は、青い顔をしながら、皐月のその一言に身震いした。

「悪い……。俺、パスするわ」

「え、功一君、乗らないの？あれ、もしかして     ジェット・コースター嫌いだったりした？」

功一の顔を覗き込む皐月に、彼は齒切れ悪く答えた。

「実は     俺、ジェット・コースター、苦手なんだ……」

その告白を聞いて、皐月は目を丸くした。

「何だ。だったら、言ってくれば良かったのに」

「いや、言えねーだろ、普通さ。やっぱさ、一応、男だしね。プライドってなモンもあるしさ」

下を向いて鼻の頭を指先で掻きながら、功一はボソボソと弁解した。

「そんな事、気にしないのに」

「それが男ってモンなの」

怒ったように言い捨てると、功一はズンズンと早足で歩き出した。  
「あ、待ってよー」

少しふくれて先を歩く功一の背中を見ながら、そんな彼を皐月は「ちよつとカワイイかも」などと考えていたのだ。

手紙を読みながら、皐月はそんな事を思い出していた。確かあの日、遊園地の目玉となつてゐるパレードを見る事は出来なかった。元々、大学が休講になつた事によるデートだったために、夜遅くなる訳にもいかなかったのだ。

「またいつか、一緒に来ような。次は絶対、パレード見ようぜ」  
そう言つて笑つた、功一の笑顔が眩しかったのを憶えている。

皐月は吸い寄せられるように、手紙を読み進めて行つた。他人の手紙だという事は理解しているのだが、どうしても読むのを止められなかった。

君は覚えているかな？ 初めてキスしたときの事。

女の人つて雰囲気を大事にするつて聞いてたから、あれでかなり悩んだんだぜ。でも、結局は何だか勢いになつちやつたけど……。

その後、実はけっこうヘコんだんだ。

君がもしかしたら、僕の事を嫌いになつてしまつたかもしれないつて。

君が次の日、少し照れ臭そうに笑いかけてくれた時、心底、ホツとした。

自分つて、こんなに小心者なのかと思つたよ。

君を好きになればなるほど、君に嫌われるのが怖かつた。

こんな自分でいいのか。いつか君が僕の元からいなくなつてしまふんじゃないのか。

そんな事ばかり考えてた。

そんな自分が情けなくて、随分イライラしてた時期もあつた。

「皆、そうなのかなあ……。あたしも功一の事、随分疑つたりした時期あつたし」

手紙の主が綴つた言葉は、一つ一つ皐月の心の琴線に触れた。彼



の言葉に、皐月自身忘れかけていた小さな思い出が、鮮やかな輝きを伴って蘇る。

卒業が間近に迫ってくるにしたがって、皐月は功一に対して不安を感じるようになっていった。それだけでなく、卒業製作や卒論で忙しくなり、二人で会う時間が少なくなってきたりしている時期だった。

ゼミに出ている、功一が他の女子と話していたりするのを見ると気になって仕方なかった。卒業してしまえば、時間を気にせずに出会える。そう思う反面、就職によって離れ離れになってしまうという不安もあった。これまでとは違う環境、これまでとは違う人間関係。一緒にいられない時間が増えていく。皐月の知らない人間との付き合い。学生とは違う、大人の女性との出会いもあるだろう。功一が皐月から離れていってしまうかもしれない。

そうした不安がストレスとなり、常に皐月をイライラさせた。何気ない言葉が、皐月の心を揺さぶった。後から思い出そうとしても、原因が良く判らないケンカを何度もした。そして、皐月のイライラは功一にも伝染していったのだ。

「やきもちも、度を越すとただの迷惑だ」

功一の言葉が、さらに皐月を追い詰めていった。

「こんなに、功一君の事を思っているのに」

「愛情と束縛は違うんだ」

「功一君の事が好きだから」

「好きだって言う言葉は、何を要求してもいいっていう免罪符じゃないんだ」

幾度も幾度も繰り返された会話。

皐月の不安を煽ったのは、それだけではなかった。自分自身の就職先が決まらず、先の見えない不安が、皐月の心をさらに沈んだものにしていった。功一の就職が決まった事に対する焦り。自分だけが、周囲から取り残されてしまうような、そんな気になってしまったのだ。

「功一君は、いいわよ。もう会社も決まって、卒業を待つだけなん

だから」

そんな嫌味が口を突いて出た事もある。それでも功一は、辛抱強く皐月を支えようとしてくれたのだった。だが、功一が皐月を支えようとすればするほど、皐月は功一を避けるようになっていった。不安とストレスと疑心暗鬼。それから、自分自身への自己嫌悪。ないまぜになってしまった複雑な心境を、皐月本人も持て余していたのだ。自分が恐ろしく醜い人間になってしまったような気がした。醜い自分を功一が好きでいてくれるはずがない。でも、功一と別れる気にもなれなかった。だから仕方なく、皐月は功一と距離をとったのだ。

結局、就職は決まらないまま、二人は卒業を迎えた。功一は新入社員として、皐月はアルバイトをしながら就職活動が続ける事になった。少しの間ではあったが、時間と距離をおいたお陰か、皐月も落ち着きを取り戻しつつあった。やりきれない思いを誰かにぶつけても始まらない。ようやく、そう思えるようになったのだ。

「学生」という肩書きを外し、仕事をするようになって、皐月も視野が広がった。新しい付き合いも増えた。それなりにオシャレや化粧を楽しむようになったし、多少だが、酒も覚えた。いつの間にか大学時代に抱いていた功一への疑いも忘れていった。

功一も新入社員という立場上、覚える事も多く、お互いに時間のすれ違いが続いていた。それでもマメに連絡をくれる功一に対して、いつしか皐月は安心感を抱くようになっていった。大丈夫。彼は自分を思ってくれている。彼はあたしの事を必要としてくれている。それに甘えて、皐月の方からは、だんだん連絡を取る事が少なくなっていた。

僕は君と一緒にいる事で、どこかに甘えがあったんだろうと思う。

君は僕の事を愛してくれている。君が僕から離れて行く事なんて、絶対にありえない。

そんなふうにしてしまったんだ。

いつの間にか、僕は忘れていたんだね。

恋の天秤は、どちらか一方に傾いていては、上手く行かないって事をね。

僕は君に押し付けていたんだろう。

君なら、こうしてくれるだろう。君なら、判ってくれるはずだ。

君は。君なら。君だから……。

でも、本当に君の事を判っていたんなら、ボク達は別れなくて済んだはずなんだ。

僕は、実は何も判っていなかったんだと、君と別れてから気が付いた。

今さら気が付いても、遅いんだけどね。

今頃気が付くくらいなら、もっと早く気付けば良かった。

僕はきつと君に、僕の理想を押し付けていたんだね。

君の思いを全部無視して。君の事を考えもせずに。

君はあの頃、一体何を感じていたんだろう。僕に何を言いたかったんだろう。

この頃、そんな事ばかり考えているよ。

「え？ 今、何て言ったの？」

自分の話に夢中だった皐月は、功一が何を言ったのか、良く判らなかった。

「皐月はさ、どうして俺と付き合ってるんだ？」

功一から投げかけられた質問の意味が、皐月には理解できなかった。

「どうしてって。好きだからに、決まってるじゃない。何で、そんな事聞くの？」

戸惑いながら答える彼女に、功一はなおも問いかけた。

「俺のどこが好きなんだよ？」

「どこがって言われても……。功一の優しいところとか、私の事を

判ってくれているところか。あとは、私の事を好きでいてくれるところも」

なぜ、そんな事を聞くのだろうか？ 好きだからに決まっている。それを、わざわざ確認する必要があるのだろうか？ 皐月は、功一の本心が判らず困惑した。

「俺、優しくなんかないよ。結構、わがままだしな。皐月の事だつて、最近、良く判らなくなってきたよ。皐月のこと、好きなのかどうかも、判らなくなってきた」

突然告げられた言葉に、皐月は頭が真っ白になるのを感じた。

「な　ん……」

「自信が無くなってきたんだよ。皐月の事、好きなのかどうか。俺は皐月にとって、何なのか」

功一は手の中のグラスに目を落としながら、皐月に思いを伝えた。  
「もしかして皐月は、自分の事を好きで、聞き訳が良くて、自分にとって都合のいい男なら、誰でもいいんじゃないのかってね」

「そんな　」

呆然としている皐月を残し、功一は立ち上がった。

「少し時間をくれないか。俺にとって、皐月は何なのか。皐月にとって、俺は何なのか。考えてみたいんだ」

そう言つと、伝票をつかんでテーブルを離れて行つた。皐月は何も言えないまま、去つて行く彼の背中を見ているしかなかった。

何がいけなかったんだろう。功一の気分を害するような事を、気付かないうちにやってしまったのだろうか。判らない。

功一の言葉がショックで、アルバイト先でも、失敗を繰り返している皐月を見かねて、先輩の吾妻あづまさやかが声をかけてきた。

「皐月ちゃん、どうしたの？　ここんトコ、ちょっとおかしいよ？　何か心配事があるんなら、相談にのるよ」

仕事が終わつて、後片付けをしていた皐月は、迷いの表情で見返してくる。

「そんな顔して……。何、恋の悩みなの？」

「吾妻先輩」

「そうそう。人生経験豊富な、吾妻先輩に話してごらん。力になるから」

戸締りを確認し、吾妻と二人で歩きながら、夜の公園に入っていく。ブランコに腰掛けて言葉を探している皐月に、自販機で買ってきた缶コーヒーを差し出し、吾妻も隣のブランコに腰掛けた。

「ほら、これでも飲んで。落ち着いたら、話してみ。聞いてもらうだけでも、随分、楽になるから」

缶コーヒーで喉を潤した後、皐月は重い口を開いた。言葉が上手く見つからなくて、話も前後したりしたが、吾妻は黙って最後まで聞いてくれた。

「そっか……」

皐月の話を聞き終わった吾妻は、一言、そう呟くとブランコを揺らした。手の中にある、小さな缶の中に言葉を落とし込むように、皐月は口を開いた。

「本当に判らないんです。どうして、功一があんな事を言い出したのか」

そんな皐月に、吾妻が声をかけた。

「彼氏が怒るのも、無理ないと思うけどな」

思いがけない吾妻の言葉に、皐月は耳を疑った。

「そんな。先輩、どうしてですか？」

「だって、皐月ちゃん、恋愛の大原則を忘れてるもん」

「恋愛の大原則……って、何ですか？」

「すごく簡単な事よ。そして、一番大切な事でもあるわね」

吾妻はポケットから煙草を引っ張り出すと、一本くわえて火を点けた。夜の空気の中に、白い煙を吐き出しながら困惑顔の皐月を見る。

「恋はね、一人じゃ出来ないって事だよ」

そんな事は判りきった事だ。吾妻は何を言いたいのか？皐月の顔に、それは強く表れたのだろう。煙草をくわえたまま、吾妻はニヤ

りと笑って見せた。

「何だ、当たり前の事　って思ってるでしょ？　その通り。すごく当たり前の話なんだ。けど、いつの間にか忘れちゃったよな。あたしの時もそうだったし」

「吾妻先輩も？」

「臯月ちゃん、彼氏に要求するばかりで、自分で努力する事忘れてなかった？」

「そんな事……」

「そおお？　ちゃんと自分から連絡したり、してた？　留守電やメールの返事は？　デートの時、自分の事ばかり話してなかった？」

「え、それは　」

思い当たる節が、確かにあった。

「でも、そんな事で」

「それが大事なんだってば」

吾妻は苦笑いした。

「臯月ちゃんはさ、彼女としての努力を怠けちゃったんだよ。恋って、あれで結構、努力が必要なんだよ」

短くなつた煙草を地面にこすり付けて消すと、ブランコから立ち上がった。

「よおく、考えてごらん。これから彼氏と上手くやって行きたいなら、絶対に必要な事だからね」

そう言つと臯月に手を振つて、吾妻は去って行つた。

「話せば、楽になるって言つたくせに」

吾妻に話を聞いてもらった事で、さらに悩みが増えてしまったような気がする。アパートに戻り、一人考えてみた。

「恋は一人では出来ない……か」

部屋で膝を抱えて、携帯電話を見つめる。吾妻が言う通り、『恋』をするための努力を怠ってしまったんだろうか？　でも、自分達は付き合っていた訳だし。功一の事を臯月が好きだという、それをわざわざ口に出さなくても、彼氏だったら判ってくれているはずだ。

だから、あの日以来、皐月が悩み続けている事だって、功一なら

……。

今考えてみれば、自分が『彼女』という肩書きに安心していても、吾妻の言った事が正しかった事も判る。結局は、認めたくなかったのだ。功一が言い出したのだから、彼から連絡があったら……。そうして、自分から功一に連絡する事をしなかったのだ。ささやかな、皐月自身のプライドのために。

「あの時、あたしの方から連絡しておけば、何か変わったのかなあ」  
スポーツドリンクを喉に流し込み、皐月はため息を吐いた。

人は、一人では寂しい生き物だから、共に歩いてくれる相手を探すんだって。

生まれてきた時から、愛する誰かのために、魂には半分の隙間があるって。

僕にそんな事を話してくれたのは、誰だったかな。

君が僕の隣からいなくなって、つくづく思い知らされたよ。

僕の視界から君が消えて、僕の手が届く範囲から君がいなくなって

……。

痛いほど、それを感じている。

僕があの時、下手に意地を張ったりしなければ、君と別れることはなかったのかな？

それとも、この別れは避けられないものだったのかな？

皐月にとって、思いも寄らないメールが届いたのは、功一と会わなくなつて二ヶ月後の事だった。アルバイト先で、仕事中に皐月の携帯電話が鳴った。

（功一からだ。きつと、仲直りのメール）

そう思つてメールを確認した皐月は、自分の目を疑った。

『もつ、終わりにしよう。さようなら』

（え？ どう言う事なの？）

何度も何度も、携帯電話のモニタを見直す。だが、表示された文字は変わらない。

（どう言う事？ どう言う事なの？）

立ち尽くしたまま様子のおかしい皐月に、吾妻が気付いた。

「皐月ちゃん？」

かけられた声に、見返してきたのは暗く虚ろな目。彼女が握り締めた携帯電話に視線を落とした吾妻はの眉がひそめられた。

「店長ー！ すいません。皐月ちゃん、具合悪そうなので、休ませてください」

店長の了解を得ると、吾妻は皐月と一緒に休憩室へ向かった。スチールの椅子に皐月を座らせて、吾妻は正面に腰かけた。

「皐月ちゃん。あんた、あれからちゃんと彼氏と話、したの？」

吾妻の言葉に、皐月は黙って首を横に振った。その無言の返事に、吾妻は『やつぱり』と呟いた。

「あの時、言ったよね？ これから先も二人でうまくやって行きたいんだったら、良く考えるんだよ、」

って。あたしの言葉は、皐月ちゃんに届かなかったんだ。――

煙草をくわえた吾妻は、天井を仰いで語り始めた。

「皐月ちゃんには、あたしとおんなじ間違いをしてほしくなかったんだけどなあ」

「え？」

意外な言葉に、皐月は顔を上げた。

「あたしもさあ、やつちゃったんだよね。相手の気持ちも考えないで、勝手に理想を押し付けて。『彼氏なんだから、あたしの事ぐらい判ってるはずでしょ』って。皐月ちゃん、そう思ったでしょ？」

「……思いました。きっと、あたしの事を判ってくれているはずだって」

そんな皐月に、吾妻はヒラヒラと手を振って言った。

「判んないって。超能力者じゃないんだから。大事な言葉は、口に出して言わなきゃ相手には伝わらないんだよ。絶対に」



「伝わら　ないんだ……」

「当たり前だよ。じゃあ、皐月ちゃんは彼氏の考えてる事、何でも判る？」

「　　いいえ」

「ね？　判らなくって、当然なんだってば。それを『彼氏なんだから』とか『彼女なんだから』とかって、勝手に自分の都合を押し付けてるの」

そうか、そうなんだ。考えてみた事もなかった。そう言われてみれば、皐月自身は、功一の事など何も判っていなかったのだ。それと同じように、功一も皐月の事など判りはしない。当たり前だ。皐月は何一つ、大切な事を言葉にして伝えていないのだから。

「だから、良く考えてくれて言っただけだね。ホント、人の気持ちちって、伝わらないもんだなあって思うわよ」

結局火を点けないままだった煙草を箱に戻し、吾妻は立ち上がった。

「あたしみたいに、このまま終わらせるのか。それとも、もう少し足掻いてみるか。それは、皐月ちゃんが決める事だよ」

ドアノブに手をかけた吾妻は、優しい目をして振り返った。

「そんな情けない顔じゃ、お店に出られないでしょ。店長には上手く言っというてあげるから、今日は帰った方がいいよ」

「ありがとうございます」

様々な思いを込めて、立ち上がった皐月は深々と頭を下げた。ドアの閉まる音がするまで、顔を上げる事が出来なかった。

功一に連絡をしなければ。話をしなければ。着替えをして荷物を持つと、店を後にした。歩きながら、功一の携帯に電話を入れる。だが、携帯の電源は切られていて繋がらない。仕方なく、功一の勤めている会社に連絡を入れてみた。しかし、あいにくの不在。出鼻をくじかれて、皐月は大きくため息を吐いた。

「タイミングが悪いのかなあ」

アルバイトを早めに切り上げたので、功一の仕事が終わるまでに

は、まだまだ時間がある。とにかく、一度、自宅へ帰ろう。落ち着かない心を抱えて、アパートへ戻る。部屋に戻って来ても、何一つ手につかない皐月は、出ないと判っている功一のアパートへ電話を入れてみる。留守番電話に『話をしたいから』とメッセージを残せば、後は何も出来ない。

陽が落ちていく部屋の中で、一人膝を抱えて待っている。時計の針が時間を刻む音だけが、やけに大きく感じられた。

ル トウルルルル 。

薄暗い部屋に、電話機の着信を知らせるライトが点滅する。バタバタと電話に近寄り、慌てて受話器を取ると耳に当てた。

「も、もしもし!？」

「もしもし 』

「功一なの?」

「……何? 話したい事があるって、留守電に入ってたけど」

「え? う、うん。今日もらったメールの事で……」

「……それで?」

一人で電話を待っている間、あれも話そう、これも話そうと考えていたのだが、いざ声を聞いてしまうと上手く言葉が出てこない。

頭の中で意味を成さない言葉の羅列が、グルグルと渦を巻いている。

「あのメール……別れようって 。どうしてなの?」

しばらくの間、沈黙が続いた。

「 』

「功一?」

「お前……、俺がしばらく会つこのやめようって言った時、どう思った?」

「どう思ったって……。どうしてだか、訳が判らなかった。どうして功一が、あたしと会わないなんて言うのか理解できなくて」

「だったら何で、あれから連絡してこなかったんだよ? 訳が判らないなら、判るまで訊けば良かったんだ」

「訊こうと思ったわよ。でも 』

『でも結局、皐月は連絡してこなかった。どうせ放っておいても、俺の方から連絡してくると思ってたんだろ?』

その言葉に、皐月は何も言い返す事ができなかった。確かにそう思っていたから。『大丈夫。そのうちに功一の方から、きっと連絡してくるはずだから』。反論の余地はなかった。黙り込んでしまった彼女に、受話器の向こうから功一が問いかけた。

『皐月。お前、今日が何の日か覚えているか?』

唐突に投げかけられた質問の意味を、皐月は捕まえる事が出来なかった。

「何の日って……今日?」

判らず聞き返した皐月に、功一は回線を通してため息で答えた。

『今日は俺達が付き合って、ちょうど二年目だ。そんな事も忘れている程、お前は自分の事しか見えてないんだよ。心の中で考えていたって、言葉に出さなきゃ、気持ちには伝わらないんだよ。俺はもう疲れたんだ。伝わってこない皐月の心を、ああでもない、こうでもないと思い悩むのに』

功一がこれ程、二人の事で悩んでいたなんて。自分一人だけが恋愛をしているような気になって、皐月だけが悲劇のヒロインみたいな気になって……。

『この二ヶ月、ずっと考えていたんだ。このまま皐月と一緒にいた方がいいのか。でも一緒にいても、状況は変わらないかも知れない。もしかしたら、本当は、皐月が好きなのは俺じゃないのかも知れない。とかね』

「そんな事……!」

そんな事はない。自分は確かに、功一の事を好きになって、付き合って。

『もういいんだ。もう終わりにしよう。じゃあな』

皐月がちゃんとした言葉を何一つ見つけられないうちに、受話器から聞こえてくるのは無機質な電子音だけになってしまった。

受話器を握っていた手が、力なく垂れた。ノロノロと電話を切っ

た皐月は、膝を抱えて丸くなった。やがて、彼女の口から嗚咽がもれ、すっかり暗くなってしまった室内に響いた。掛け違えてしまったシャツのボタンを、掛け直すチャンスは与えられなかった。傾いていた恋の天秤は、元に戻らないまま倒れてしまったのだ。

それが一週間前の話だ。そして手紙は続く。

きつと、何度でもやり直すチャンスはあったんだ。

ただ僕が、そのチャンスに気付かなかったただけで、君はずっと待っていてくれたんだ。

何度も、何度も。

そうやって僕は、少しずつ君の信頼を失っていったんだね。

僕は君に甘えていたんだろう。一人勝手な理想を押し付けて。

その上に胡坐をかいて、努力する事を忘れていた。そうする必要さえ、感じていなかった。

君はそんな僕を見て、どんな風に思っていたんだろう？

君の出した答えは、二人の別れというものだった。

もう君の心の中に、僕への思いは残っていないんだろうか？

今さら、何を女々しい事を。と思われるかもしれない。

未練がましいと、嘲笑われるかも知れない。

それでも構わない。

僕の中に残っている君への想いを、伝えないままにしておく訳にはいかなかった。

今でも僕は、君の事が好きだ。

信用できないって、言われるかもしれないけど。でも、どうしても君に伝えておきたかった。

君は今でも、僕の事を好きでいてくれるんだろうか？

僕の事なんか、忘れてしまったかもしれないね。

この手紙を書いている今でも、実を言えば迷っている。

今さらこんな手紙が届いて、果たして君は読んでくれるんだろうか？  
そのまま、捨てられてしまっんじゃないか？ ってね。

でも、僕の想いを伝えないまま終わりには出来なかった。信用してもらえなくてもいい。

ただ、君を好きになった気持ちまで、嘘にしたくない。別れてしまった事で、何もなかった事にしたくないんだ。何を言われても構わない。

君の事が、今でも好きだ。愛している。長々と書いてしまったけれど、どうしてもこれだけ伝えておきたかった。

後は日付が書き込まれているだけだ。差出人も受取人も、名前は記載されていない。

皐月は読み終えた手紙を丁寧にたたむと、深く深く息を吐いた。いつの間にか、涙で視界がにじむ。

「あたしも同じだ、この手紙の人と」

皐月がこの手紙と出会ったのは、偶然なのか、必然なのか。手紙を読み終わった皐月の胸に去来するもの。それは一体、どのような想いであるのか。

「『君を好きになった気持ちまで、嘘にしたくない』……か。あたしが、功一を好きになった気持ち。別れた事で、その気持ちは嘘になったの？ あたしはまだ、功一の事が好きなの？ それとも……」

じつと自問自答を繰り返す。辿り着く答えは一つ。そのことを確認すると、皐月は立ち上がった。一瞬だけ電話に視線をやったが、首を振って着替え始めた。鏡を覗き、自分の決意を確かめるように二・三回頬を叩く。

「あたしも　嘘にしたくない。何もなかった事にしたくないよ」  
部屋の明かりを消すと、ドアを閉めた。

真っ白な封筒を見つめながら、皐月は駅前の広場でベンチに座っていた。新しく封をしたその封筒を、彼女は優しく指でなでている。  
「皐月！」

名前を呼ばれて顔を上げると、改札口を出て来た功一が、通りの向こうで手を振っている。皐月はニツコリ笑って立ち上がると、手の中の封筒に語りかけた。

「ありがとう。あなたのお陰で、あたしは自分の想いを嘘にしなくて済んだわ。これから、あたしのような誰かを助けてね」

そして、ベンチの上にそっと封筒を置いた。

「何してんだよ？」

軽く息をきらしながら、功一が手許を覗き込んでくる。

「ん？ 何でもないの」

「気になるじゃないか。何だよ？」

「うん。実はね」

功一の隣りに並んで歩きながら、皐月はベンチを振り返った。

（名前も知らない、どこかの誰か。あなたがいてくれたから、あたしはもう一度、功一の事をキチンと好きになろう、って思えた。やり直すチャンスを与えてくれた事に、感謝してる。本当にありがとう）

別れた事で、何もなかった事にしたくない。それは皐月も同じ気持ちだった。あの時、部屋を飛び出して行かなければ、皐月が心を決めなければ、功一を完全に失う事になっていただろう。皐月の心に後悔だけを残して。

笑顔を浮かべて功一を見上げ、皐月は手紙を拾ったあの日の事を語り始めた。

きつとあの手紙は、これまでもいろんな人の手に渡り、それぞれの恋を助けてきたのだろう。何の確証もなかったけれど、皐月はそう思っていた。そしてこれからも、同じく悩める恋人達を救うのだろう。

（あなたの恋は、大丈夫だったの？ 名前も知らない誰か。どこかにいるあなたが、幸せである事を祈ります）

街を行けば、幾人もの人とすれ違う。もしかしたら、手紙の主と出会っているのかも知れない。遠い過去に、すでに出会っていたの

かも知れない。この街のどこかで、これからすれ違うのかも知れない。そんな誰かのために、皐月は胸の中で祈った。

ベンチの上に置かれた、差出人も受取人もない真新しい封筒。それは吹いてきた、一瞬の強風に巻き上げられ、ふわりと宙へ舞った。恋に悩む誰かの許へ、『今ならまだ、やり直せるよ。大丈夫』。そんなメッセージを伝えるために。そして、定められた必然によって手にした誰かが、便箋を開くときに語り始めるのだ。

いまだ忘れえぬ君へ

君と会わなくなってから、早いもので、もう二ヶ月になるんだね。君は元気でやっているだろうか？

この世界にある、全ての恋人達の上に幸あれと祈る。

〈Fin〉

（後書き）

ようやく「恋文」いまだ忘れぬ君」 完結です。

不得手克服！とばかりに書き始めた「恋愛モノ」だったので、  
が見事に玉砕してしまいました。

やはり、私に「恋愛モノ」は無理だったようで……。

もっと早く気がつけよ！という突っ込みも飛んできそうですが、  
そこはそれ、ひとつ、多めに見てやるということ。

いや、もう、本当に思い知らされました。これが、最初で最後の  
「恋愛モノ」になると思います。

お目汚し作品ですが、もしかして、お気に召していただければ幸いです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5716v/>

---

恋文～いまだ忘れえぬ君へ～

2011年8月8日14時09分発行